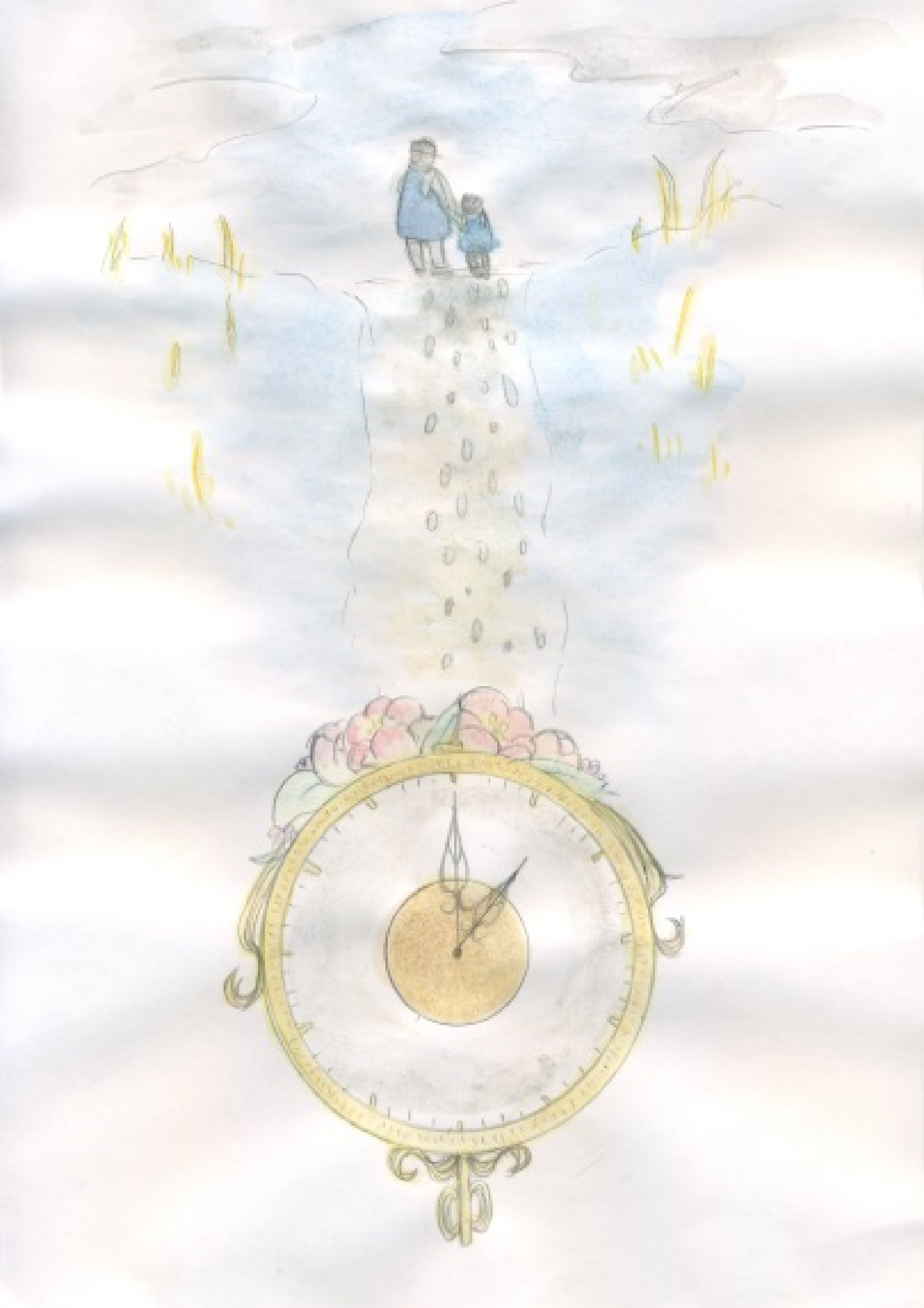




うた時計

新美南吉

二月のある日、野中のさびしい道を、十二、三の少年と、皮のかばんをかかえた三十四、五の男の人が、同じ方へ歩いていった。

風がすこしもないあたにかい日で、もう霜《しも》がとけて道はぬれていた。

かれ草にかけをおとして遊んでいるからすが、ふたりのすがたにおどろいて、土手をむこうにこえるとき、黒い背中《せなか》が、きらりと日の光を反射するのであった。

「坊《ぼう》、ひとりでどこへいくんだ」

男の人が少年に話しかけた。

少年はポケットにつつこんでいた手を、そのまま二、三ど、前後にゆすり、人なつこいえみをうかべた。

「町だよ」

これはへんにはずかしがったり、いやに人をおそれたりしない、すなおな子どもだと、男の人は思ったようだった。

そこでふたりは、話しはじめた。

「坊、なんて名だ」

「れんていうんだ」

「れん？ れん平《ぺい》か」

「ううん」

と、少年は首を横にふった。

「じゃ、れん一か」

「そうじゃないよ、おじさん。ただね、れんていうのさ」

「ふうん。どういう字書くんか。連絡《れんらく》の連か」

「ちがう。点をうつて、一を書いて、ノを書いて、ふたつ点をうつて……」

「むずかしいな。おじさんは、あまりむずかしい字は知らんよ」

少年はそこで、地べたに木ぎれで「廉」と大きく書いてみせた。

「ふうん、むずかしい字だな、やっぱり」

ふたりはまた歩きだした。

「これね、おじさん、清廉潔白《せいれんけつぱく》の廉て字だよ」

「なんだい、そのセイレンケツパクてのは」

「清廉潔白というのは、なんにも悪いことをしないので、神様の前へ出ても、巡査につかまっても、平気だということだよ」

「ふうん、巡査につかまってもな」

そういつて、男の人はにやりとわらった。

「おじさんのオーバーのポケット、大きいね」

「うん、そりや、おとなのオーバーは大きいから、ポケットも大きいさ」

「あったかい？」

「ポケットの中かい？ そりゃあ、あったかいよ。ぽこぽこだよ。こたつがはいってるようなんだ」

「ぼく、手を入れてもいい」

「へんなことをいう小僧《こぞう》だな」

男の人はわらいだした。でも、こういう少年がいるものだ。近づきになると、相手のからだにさわったり、ポケットに手を入れたりしないと、承知ができぬという、ふうがわりな、人なつこい少年が。

「入れたっていいよ」

少年は、男の人のがいつものポケットに、手を入れた。

「なんだ、ちつともあったかくないね」

「はっは、そうかい」

「ぼくたちの先生のポケットは、もっとぬくいよ。朝、ぼくたちは学校へいくとき、かわりばんこに先生のポケットに手を入れていくんだ。木山先生というのさ」

「そうかい」

「おじさんのポケット、なんだか、かたい冷たいものがはいってるね。これなに？」

「なんだと思う」

「かねでできてるね……大きいね……なにか、ねじみたいなものがついてるね」

するとふいに、男の人のポケットから美しい音楽が流れたので、ふたりはびっくりした。男の人はあわてて、ポケットを上からおさえた。しかし、音楽はとまらなかった。それから男の人は、あたりを見まわして、少年のほかにはだれも人がいないことを知ると、ほっとしたようすであった。天国で小鳥がうたつてもいるような美しい音楽は、まだつづいていた。

「おじさん、わかった、これ時計《とけい》だろう」

「うん、オルゴールってやつさ。おまえがねじをさわったもんだから、うたいだしたんだよ」

「ぼく、この音楽だいすきさ」

「そうかい、おまえもこの音楽知ってるのかい」

「うん。おじさん、これ、ポケットから出してもいい？」

「出さなくてもいいよ」

すると、音楽は終わってしまった。

「おじさん、もう一ぺん鳴らしてもいい？」

「うん、だアれもきいてやしないだろうな」

「どうして、おじさん、そんなにきよろきよろしてるの？」

「だって、だれかきいていたら、おかしく思うだろう。おとながこんな子どものおもちゃを鳴らしては」

「そうね」

そこで、また男の人のポケットがうたいはじめた。

ふたりはしばらくその音をききながら、だまって歩いた。

「おじさん、こんなものを、いつも持って歩いてるの」

「うん、おかしいかい」

「おかしいなア」

「どうして」

「ぼくがよく遊びに行く、薬屋のおじさんのうちにも、うた時計があるけどね、だいじにして、店のちんれつだなの中に入れてあるよ」

「なんだ、坊、あの薬屋へ、よく遊びに行くのか」

「うん、よくいくよ、ぼくのうちの親類だもん。おじさんも知ってるの？」

「うん……ちよつと、おじさんも知っている」

「あの薬屋のおじさんはね、そのうた時計をとでもだいじにしていってね、ぼくたち子どもに、なかなかさわらせてくれないよ……あれッ、またとまっちゃった。もう一ぺん鳴らしてもいい？」

「きりがいいじゃないか」

「もう一ぺんきり。ね、おじさんいいだろ、ね、ね。あ、鳴りだしちゃった」

「こいつ、じぶんで鳴らしといて、あんなこといってやがる。ずるいぞオ」

「ぼく、知らないよ。手がちよつとさわったら、鳴りだしたんだもん」

「あんなこといってやがる。それで坊は、その薬屋へよくいくのか」

「うん、じき近くだからよくいくよ。ぼく、そのおじさんとなかよしなんだ」

「ふうん」

「でも、なッかなか、うた時計を鳴らしてくれないんだ。うた時計が鳴るとね、おじさんは、さびしい顔をするよ」

「どうして？」

「おじさんはね、うた時計をきくとね、どういうわけか周作《しゅうさく》さんのことを思い出すんだって」

「えッ……ふうん」

「周作って、おじさんの子どもなんだよ。不良少年になってね、学校がすむと、どっかへいっちゃったって。もうずいぶんまえのことだよ」

「その薬屋のおじさんはね、その周作……とかいうむすこのことを、なんとか知っているかい？」

「ばかなやつだって、いってるよ」

「そうかい。そうだなあ、ばかだな、そんなやつは。あれ、もうとまったな。坊、もう一どだけ、鳴らしてもいいよ」

「ほんと？……ああ、いい音だなあ。ぼくの妹のアキコがね、とっても、うた時計がすきでね、死ぬまえに、もう一ぺんあれをきかしてくれて、ないてぐずったのでね、薬屋のおじさんここから借りてきて、きかしてやったよ」

「……死んじゃったのかい？」

「うん、おとしのお祭のまえにね。やぶの中のおじいさんのそばにお墓《はか》があるよ。川原《かわら》から、おとうさんが、このくらいのもるい石をひろってきて立ててある、それがアキコのお墓さ、まだ子どもだもんね。それでね、命日《めいにち》に、ぼくがまた薬屋からうた時計を借りてきて、やぶの中で鳴らして、アキコにきかしてやったよ。やぶの中で鳴らすと、すずしいような声だよ」

「うん……」

ふたりは大きな池のはたに出た。むこう岸の近くに、黒く二、三ばの水鳥がうかんているのが見えた。それを見ると少年は、男の人のポケットから手をぬいて、両手をうちあわせながらうた

った。

「ひいよめ、

ひよめ、

だんご、やアるに

くウぐウれッ」

少年のうたうのを聞いて、男の人がいった。

「いまでもその歌をうたうのかい？」

「うん、おじさんも知っているの？」

「おじさんも子どものじぶん、そういつて、ひよめにかかったものさ」

「おじさんも小さいとき、よくこの道をかよったの？」

「うん、町の中学校へかよったもんさ」

「おじさん、また帰ってくる？」

「うん……どうかわからん」

道がふたつにわかれているところにきた。

「坊はどっちイいくんだ」

「こっち」

「そうか、じゃ、さいなら」

「さいなら」

少年はひとりになると、じぶんのポケットに手をつっこんで、ぴよこんぴよこんはねながらいった。

「坊ウ……ちよつと待てよオ」

遠くから男の人がよんだ。少年はけろんと立ちどまって、そっちを見たが、男の人がしきりに手をふっているの、またもどつていった。

「ちよつとな、坊」

男の人は、少年がそばにくると、すこしきまりのわるいような顔をしていった。

「じつはな、坊、おじさんはゆうべ、その薬屋のうちでとめてもらったのさ。ところがけさ出るとき、あわてたもんだから、まちがえて、薬屋の時計を持ってきてしまったんだ」

「……………」

「坊、すまんけど、この時計とそれから、こいつも（と、がいつもの内かくしから、小さい懐中時計《かいちゅうどけい》をひっぱり出して）まちがえて持ってきたから、薬屋に返してくれないか。な、いいだろう？」

「うん」

少年はうた時計と懐中時計を、両手にうけとった。

「じゃ、薬屋のおじさんよろしくいつてくれよ。さいなら」

「さいなら」

「坊、なんて名だったっけ」

「清廉潔白《せいれんけっぱく》の廉《れん》だよ」

「うん、それだ、坊はその清廉……なんだっけな」

「潔白だよ」

「うん潔白、それでなくちやいかんぞ。そういうりっぱな正直なおとなになれよ。じゃ、ほんとにさいなら」

「さいなら」

少年は、両手に時計を持ったまま、男の人を見送っていた。男の人はだんだん小さくなり、やがて稲積《いなづみ》のむこうに見えなくなってしまうた。少年はてくてくと歩きだした。歩きながら、なにかふにおちないものがあるように、ちよつと首をかしげた。

まもなく少年のうしろから自転車一台、追っかけてきた。

「あッ、薬屋のおじさん」

「おう、廉坊《れんぼう》、おまえか」

えりまきであごをうずめた、年よりのおじさんは、自転車からおりた。そしてしばらくのあいだ、せきのためものがいえなかった。そのせきは、冬の夜、枯木《かれき》のうれをならす風の音のように、ヒュウヒュウいった。

「廉坊、おまえは村から、ここまでできたのか」

「うん」

「そいじゃ、いましがた、村からだれか男の人が出てくるのと、いっしょにならなかったか」

「いっしょだったよ」

「あッ、そ、その時計、おまえはどうして……」

老人は、少年が手に持っているうた時計と懐中時計に目をとめていった。

「その人がね、おじさんの家でまちがえて持ってきたから、返してくれっていったんだよ」

「返してくれろって？」

「うん」

「そうか、あのばかめが」

「あれ、だれなの、おじさん」

「あれか」

そういつて老人は、また長くせきいった。

「あれは、うちの周作《しゅうさく》だ」

「えッほんと？」

「きのう、十なん年ぶりで、うちへもどってきたんだ。ながいあいだ悪いことばかりしてきたけれど、こんどこそ改心して、まじめに町の工場ではたらくことにしたから、といってきたんで、ひと晩とめてやったのさ。そしたら、けさ、わしが知らんでいるまに、もう悪い手くせを出して、このふたつの時計をくすねて出かけやがった。あのごくどうめが」

「おじさん、そいでもね、まちがえて持ってきたんだってよ。ほんとにとつていくつもりじゃなかったんだよ。ぼくにね、人間は清廉潔白《せいれんけつぱく》でなくちやいけないっていったよ」

「そうかい。……そんなことをいつていったか」

少年は老人の手にふたつの時計をわたした。うけとるとき、老人の手はふるえて、うた時計のねじにふれた。すると時計は、また美しくうたいだした。

老人と少年と、立てられた自転車、広い枯野《かれの》の上にかげを落として、しばらく美しい音楽にきき入った。老人は目になみだをうかべた。

少年は老人から目をそらして、さつき男の人がかくれていった、遠くの、稲積の方をながめていた。

野のはてに、白い雲がひとつういていた。

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。